

Title	大阪大学看護学雑誌 16巻1号 新任特集
Author(s)	荒尾, 晴恵
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2010, 16(1), p. 59-60
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56826">https://doi.org/10.18910/56826</a>
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 就任のご挨拶



平成21年4月1日付で看護実践開発科学講座の教授に就任いたしました。前任校の兵庫県立大学は、大阪大学を中心に近畿の5大学が連携して取り組む文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」の1つであり、前任校の折から私も大阪大学の招聘准教授としてがん看護専門看護師の育成に携わらせていただいていた。

私の主たる研究領域はがん看護です。私自身もがん看護専門看護師を目指し兵庫県立看護大学（現：兵庫県立大学）の修士課程に進学しました。そこで、米国のUniversity California San Francisco School of Nursingからがん看護専門看護師の教育を立ち上げるために兵庫に来られた指導教授のPatricia J. Larson博士との出会いがありました。Larson先生から学んだOncology Nursingは、現在の私のがん看護に対する専門性を見出していくときの現象の捉え方、考え方の土台となっています。そして専門看護師の教育課程で自分自身が看護実践を重ね実践と理論を統合しながら学べた経験は非常に貴重なものであったと痛感しています。修士課程修了の際にLarson先生が米国に帰国されることとなり、私はそのまま兵庫県立看護大学に就職することとなりました。その後、私はがん看護の中でも患者のセルフケアに着目した症状マネジメントの看護介入を研究テーマにして研究に取り組んできています。がん患者の体験する症状は、単に身体的なものではなくがんの軌跡、文脈に彩られ症状を体験している人の独自に個々の症状の意味を持っています。この症状の意味が理解できるとケアの奥行きが広がります。また、がん患者の持つ力を目の当たりにできたときには、そのすごさに胸をうたれると同時に、それを支援できる看護とは何なのかを明らかにしていくことが私の役割ではないかと考えています。現状では、診療技術の進歩や医療費の抑制の視点から治療期間の短縮化が図られ、患者と家族にさらなるセルフケアを行うことが求められています。このような中で、患者や家族の持つ力を引き出し促進させていくための看護について研究を深めて行きたいと考えています。

大阪大学医学部附属病院には平成20年にオンコロジーセンターが開設され、がん患者に対する専門性ならびに質の高い医療サービスが提供されています。また医学系研究科には我が国で最初の緩和医療学講座もあり、がん領域の研究を行っていくにはすばらしい環境であると考えます。このような環境を活用して、他職種の研究者とも連携をとりがん看護の研究を積み重ねていく

いと考えています。また同時に次世代のがん看護の研究者、実践者の育成にも努めていく所存です。がん看護の領域は多岐にわたることや医療技術が急速に進んでいることから、自分自身も自己研鑽し看護実践力や研究能力を高めていきたくと考えています。

まだまだ未熟な部分も多く、皆様にご指導を仰ぎながら努めてまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻  
統合看護科学分野 看護実践開発科学講座  
荒尾 晴恵